

#### (4) デイオニュソスのもの（「私が古代の人々に負うもの」の4）

デイオニュロスという名の不思議な現象は「力の過剰から(aus einem Zuviel von Kraft)」のみ明らかにされる。それを最初にとり上げたのがニーチェであり、ギリシャ文化の最も深い識者であるヤーコプ・ブルクハルトは彼の著作『ギリシャ人の文化』のなかでそれについての特別の一節を挿入している。その反対例はドイツの文献学者たちであり、そのなかでもとりわけローベック(Lobeck,1781-1868)は嘔飯者である。彼は吐き気を催すほど軽薄で幼稚である。彼は、ギリシャ人は何もすることがないと「笑ったり、飛び跳ねたり、暴れまわったり」するとか、祝祭の日には「滑稽な騒ぎ」を「祭儀」の欠くべからざるものとする等と言っているが、これは「軽蔑すべきお喋り」である。<sup>i</sup>

ゲーテとヴィンケルマンが形成した「ギリシャ的」という概念は「酒神祭儀(der Orgiasmus)」と相容れない。ゲーテはそれを「ギリシャ的魂の可能性」から根本的に排除しており、それゆえ彼はギリシャ人を理解していなかったと言える。「デイオニュソスの秘儀」にこそ「古代ギリシャ的本能の根本事実」が、すなわち「生への意志」が語り出されている。彼らはこの「秘儀」によって「永遠の生」、「生の永劫回帰」を保証している。それは「死と変転を超えた生へ凱歌をあげる然り」であり、「生殖」や「性の秘儀」による「真の生」である。ギリシャ人にとって「性的象徴」は「尊ぶべき象徴そのもの」であり、「生殖」や「受胎」や「誕生」の営みの一つ一つが「最も崇高で最も祝祭的な感情」を呼び覚ましたのである。この「秘儀」では「苦痛」が神聖なものとなされ、「産婦の陣痛」が「苦痛一般」を神聖化する。これら一切が「デイオニュロス」という言葉の意味である。<sup>ii</sup>

#### (5) デイオニュソスの最後の弟子にして永劫回帰の教師（「私が古代の人々に負うもの」の5）

「溢れ出る生命感情と力の感情」としての「酒神祭儀」のうちには「悲劇的感情(das tragische Gefühl)」を解く鍵がある。この感情はアリストテレスや現代の厭世主義者たちによっても誤解されている。「悲劇」は「厭世主義の決定的な拒絶」である。それは「生の最も異質で最も苛酷な諸問題」にあっても「生に然りと言うこと」であり、これが「デイオニュソス的」と呼ばれるものである。<sup>iii</sup>

「悲劇」は「恐怖と同情」から逃れるためではなく、「恐怖と同情」とを超えて、自ら「生成の永遠の喜悦そのもの」と化すためのものである。『悲劇の誕生』は「一切価値の転換」の書であったが、ここで再度かつての出発点に立ち戻ることになる。すなわち、「哲学者デイオニュソスの最後の弟子(der letzte Jünger des Philosophen Dionysos)」である者は、「永劫回帰の師(der Lehrer der ewigen Wiederkunft)」でもあるのである。<sup>iv</sup>

### 第十一節 鉄槌は語る。

ここでは『ツァラトゥストラはかく語りき』第三巻の「古い石板と新たな石板」の二九が引用されている。そこでは「木炭(die Küchen-Kohle)」と「ダイヤモンド(Diamant)」との問答形式の対話が書かれている。

問答形式の対話の主な論点は次のところにある。①「木炭」と「ダイヤモンド」は「近親

者(Nah-Verwandte) あるいは「兄弟」である。②「木炭」は「柔らかく(weuch)」、「屈從的(nachgebend)」であり、その心のうちに「否定」や「拒絶」をもつ。③これに対して「ダイヤモンド」は「硬く(hart)」、「運命(Schicksal)」であり、「仮借なきもの(Uerbitterlich)」である。そして、④「ダイヤモンド」のように「硬さ」が「閃き、断ち切り、切り裂く」ことによって、「創造する者」となる。以上のことにより、ここでは⑤「硬くなれ！」と呼び掛けている。<sup>v</sup>

---

<sup>i</sup> Ibid., Was ich den Alten verdanke. 4, S.158

<sup>ii</sup> Ibid.,S.159

<sup>iii</sup> Ibid., Was ich den Alten verdanke. 5, S.160

<sup>iv</sup> Ibid.

<sup>v</sup> Ibid., Der Hammer redet. Also sprach Zarathustra. 3, 90. S.161